

Title	「成熟」の神学
Author(s)	相澤, 一
Citation	聖学院大学論叢,17(3) : 27-35
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=119
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

「成熟」の神学

ティリッヒの歴史解釈についての一試論⁽¹⁾

相 澤 一

Theology of Maturation

The Final Reaching Point of Paul Tillich's Interpretation of History

Hajime AIZAWA

In *Systematic Theology* vol. III (1963), Paul Tillich says that the problem of history is the problem of the existential meaning of history. He tries to answer the question by using many words such as essentialization. However, his description is so complicated that it is hard to grasp what Tillich accurately means. In his "The Decline and the Validity of the Idea of Progress," the word "maturation" or "maturing" is the key for his interpretation of history. According to Tillich, maturation is the actualization of the potential or the realization of the essential, and it is the answer to the question of the meaning of history. So we use Tillich's concept of maturation as a clue to understand the meaning of essentialization in his *ST*. Tillich's answer to the question of the existential meaning of history is maturation, that is, the fragmental actualization of the essential under the conditions of the existential.

序 『組織神学』第三巻の歴史論とそれ以前の歴史論

ティリッヒの主要な著作である『組織神学』第三巻（以下 *ST* と略）が出版されたのは一九六三年だが、そこには『組織神学』の第五部「歴史と神の国」(History and Kingdom of God) が収録されている。周知のようにティリッヒはそのアカデミック・キャリアのごく初期の頃から一貫して歴史の問題と取り組んできた思想家であるが、*ST* の歴史論は、この著作が出版されてから二年後にティリッヒは亡くなっている、ということを見ると、ティリッヒの歴史論の最終到達点、と一応みなすことが出来るであろう。しかしその内容は、今までの歴史論の集大成と言えるものでは決していない。ティリッヒの歴史論を概観する場合、その重要な要素として何と言っても第一に挙げられるのは宗教社会主義であろう。また、カイロス論・神律論・デモーニック論がドイツ時代のティ

Key words; Paul Tillich, Systematic Theology, Ontology, History, Maturation

「成熟」の神学

リッヒの歴史論の三本柱だ、と言うことも出来る。しかしそのようなことを頭に置いて *ST* を開いてみると、宗教社会主義は数箇所で見られる回顧的な口調で言及されるのみであるし⁽²⁾、神律とデモニックは第四部「生と霊」では一応それなりの分量を割いて論じられてはいるが⁽³⁾、第五部「歴史と神の国」では触れられない。唯一カイロスという概念だけが第五部の中で取り扱われるが⁽⁴⁾、しかし中心的な話題やキーワードではなく、周辺的な話題に止まっている。

そういった今までの歴史論の中に頻りに登場した諸用語の代わりに *ST* の歴史論でキーワードとして用いられているのは、「本質化」、「逆放物線を描く運動」、「永遠への高揚」といった、今までの歴史論で（否、歴史論に限らずティリッヒの今までの著作や講演も含めて）ほとんど、あるいはまったく登場したことのなかった諸用語である。「本質化」や「逆放物線」といった用語を用いて「本質 実存 本質化」という「逆放物線を描く」「永遠への高揚」の運動、という形を提示する *ST* の歴史論は、本質について論ずる第一巻、実存について論じる第二巻、そしてそれに後続する、本質化について論じる第三巻、という仕方、先行する『組織神学』の諸巻とのつながりは確保されている、とは言える。しかし、先行する歴史論とのつながりは、先に触れたように、どうもちぐはぐしたものになってしまっているのである（このことは、ティリッヒはドイツ時代に抱いていた歴史論を果たしてどのくらい最後まで一貫して維持していたのだろうか、という問いにもつながってくるが、それはさておき、ここでは、先行する歴史論を参考として *ST* の歴史論を理解することがしにくい、ということを描き出したいと思う）。

1 「進歩の理念の衰退と妥当性」(一九六四年)

そこで我々は、*ST* における歴史論と同じ歴史論をもって書かれた講演や論文は何かないだろうか、と考えるのであるが、そこで今日ここで注目したいのは、『宗教の未来』(*The Future of Religions*)⁽⁵⁾ に収録されている「進歩の理念の衰退と妥当性」(*The Decline and the Validity of the Idea of Progress*、以下「進歩の理念」と略)という論文である。これは、一九六四年の春になされた講演であり、*ST* 出版と極めて近い時期になされたものである。また、その内容も歴史解釈の問題を扱ったものなので、それは、もし我々が *ST* の歴史論を理解しようとするなら一応参照してみないわけにはいかない論文である、と言える。結論を先に言うと、この「進歩の理念」論文は、最後期ティリッヒの歴史論の理解のための、格好の助けを当ててくれるものである。特に、この発表の題名にある「成熟」(*maturation*)という用語は、この論文に出てくる表現であるが、それは *ST* で今ひとつはっきりしなかったティリッヒの主張の核心を言い表すものである、と言える。

2 歴史の問い = 歴史の意味の問い

順番として、「進歩の理念」論文を見る前に、*ST* の歴史論を概観しておきたい。*ST*の各部門は「問いと答えの相関」という構造を持っているが、*ST* における歴史論も同様の構造になっている。そこにおいて歴史の問いが扱われるのだが、*ST* においては、歴史の問いとは歴史の意味の問い、それも歴史の実存的な意味の問いである、とされている⁽⁶⁾。それに対する答えとして、「神の国」「永遠の生命」が論じられ、その中で「本質化」また「本質 実存 本質化の逆放物線」、「永遠への高揚」などといったことが語られている。この、*ST* において歴史の問いは歴史の意味の問いであると規定されている、ということ念頭に置きつつ、「進歩の理念」を読むと、我々の目を引く箇所がそこにはある。

「もし新しい始まりがあるのなら、その中で成熟していこうではないか。……新しい始まりがあるのなら、それを追求し、それを成熟へともたらそうではないか。……キリスト教神学者として、私は、成就是あらゆる瞬間に、今ここでも、歴史を越えて絶えず起こっていると
言おう。それは未来のいつかではなく、今ここで、我々自身を越えたところで起こるのである。私がこのことを今ここで我々が行っているような集会[この講演がなされている講演会]に適用させねばならないとしたら、私は、このような集会においては、時間を越えて永遠へと上昇させられるような出来事が我々の内の誰かの内的運動において起こったかもしれない
と
言うことが出来るであろう。そして、それは非ユートピア的であり、歴史および我々の個人的な生の意味の真の成就なのである」⁽⁷⁾。

この引用箇所は「進歩の理念」の最後の結論部分であるが、それに先行する議論を紹介すると、この論文の中でティリッヒは、歴史解釈の理念としての進歩は、人々に生の意味を与える答えの一つではあるが⁽⁸⁾、現代では進歩の理念は人々に生の意味の問いに対する答えを与えるという点において妥当性を喪失しており⁽⁹⁾、それゆえ進歩という理念を「カイロス」と「成熟」という二つの理念によって代替すべきである、という主張を行っている⁽¹⁰⁾。その結論としてこの引用箇所のようなことが言われるのであるが、この記述の要点は、(1)成熟は歴史の、そして個人的な生の意味の成就であり、(2)それは時間を越えて永遠へと上昇するような出来事である、(3)そしてそれは常にそこかしこで起こっていることである、ということである。このことを確認してから、*ST* の歴史論を改めて読み直してみよう。

3 歴史の問いに対する答えとしての本質化

ティリッヒが、*ST* において、歴史の問いすなわち実存的な歴史の意味の問いに対する答えとして行う「神の国」についての議論の全体像を把握し提示する試みを、論者は「パウル・ティリッヒの歴史論 『組織神学』第三巻を中心に」に記されてる論文から行った。その中から、今日ここでの発表に関係がある事柄だけをかいつまんで言うと、ティリッヒの「神の国」論において非常に重要な要素は、「時間的なものから永遠的なものへの推移」としての「高揚」(elevation)である⁽¹¹⁾。それは、実存の諸条件に服している生の内、「肯定的なもの」が「永遠の記憶」へと入れられることである、とされる⁽¹²⁾。この「肯定的なもの」とは「創られたものの本質としての真の実在性を持つもの」のことであり、それゆえこの高揚は「本質化」と呼ばれるわけである⁽¹³⁾。ところで、ここで注意すべきことは、「永遠の生命への参与は、或る存在の本質的性格と、それが時間的実存において造り出したものとの、創造的結合に依存している」と語られていることである。つまり、本質化とは、ティリッヒの規定によれば「本質と実存の混合」であるところの生から実存的な部分がふり落とされることによって起こるのではなく、実存の条件下で、本質的なものを表現するようなものが現実化すること(それはティリッヒによれば「新しい存在」とも言い得るものである)⁽¹⁵⁾にあるのであり、それゆえ、歴史の中における新しいものの創造には積極的意味が認められるわけである。

さらに、それは「あらゆる瞬間において進行しつつある過程である」⁽¹⁶⁾と言われる。「創造も、成就も、始めも、終わりも、常にある」⁽¹⁷⁾という、よく知られた言葉を見ても、それは明らかである。

少々言葉を補いつつ要約すると、ティリッヒが *ST* において、歴史の実存的な意味の問いに対する答えとしての神の国ということで「本質化」とか「永遠への高揚」という用語を用いながら主張していることは、「実存の諸制約下において本質的なものを表現するようなものが現実化する」ということがその中心であり、そういうことが起こる時、それは本質化が起こったということであり、それは永遠へと高揚され、永遠の記憶の内容となる 換言すれば、それは永遠という視点からして意味あるものである ということになるかと思う。

4 「成熟」とは何か？

こうしたことを念頭に置きつつ、再び先の「進歩の理念」の結論部分に戻ってみよう。そこにおいて成熟について語られていることのうち、(2)の、それは時間を越えて永遠へと上昇するような出来事である、ということ、(3)の、それは常にそこかしこで起こっていることであるということ、この二つが正に *ST* で歴史の問いに対する答えとして「本質化」「永遠への高揚」などの諸用語を用いて語られていることとピッタリ合致することは一目瞭然である。しかし我々はさらに一

「成熟」の神学

歩進めて、「進歩の理念」においては、先にのべたようなこと、すなわち「実存の諸制約下において本質的なものを表現するようなものが現実化すること」という意味が「成熟」という用語に込められているのか、ということを確認してみよう。

「成熟」(maturing あるいは maturation) という用語は、ドイツ時代のティリッヒの歴史論においては(ボンヘッファーに言及する中で数回出てきてはいるが)登場したことのなかった、彼のアカデミック・キャリアの最後期に書かれた歴史論において初めて登場した用語である(その点は「本質化」、「永遠への高揚」といった諸用語と同様である)。ゆえに、我々はあくまで「進歩の理念」論文を参考とするしかないのだが(実は「成熟」という用語は、*ST* にも出てくるが、それについては後にまた触れる)、「進歩の理念」において、成熟とは「自然界において木の種子が果実になるような、あるいはより大きな木に成長していくような前進⁽¹⁸⁾」とされており、他に「潜在力との関連における成熟の過程」、「潜在力の成熟⁽¹⁹⁾」といった表現もなされる。「時間の中におけるある瞬間において、人間の本質的(essential)本性が成就する⁽²⁰⁾」。

以下に引用するのは、森有正が『パピロンの流れのほとりにて』の中で語っている言葉であるが、恐らくティリッヒが「成熟」について抱いていたのは、ここに書かれているのと同じようなイメージだったのではないかと思われる。「一つの生涯というものは、その過程を営む、生命の稚い日に、すでに、その本質において、残るところなく、露われているのではないだろうか。僕は現在を反省し、また幼年時代を回顧する時、そう信ぜざるを得ない。……稚い生命の中に、ある本質的な意味で、すでにその人の全生涯が含まれ、さらに顕われてさえいる……様々なことで、この運命は覆われている。しかしそのことはやがて、密かに、あるいは明らかに、露われるだろう。いな露われざるを得ないだろう⁽²¹⁾」。

なお、ここで一言付言すると、「潜在的なものの現実化 それは種子が樹木になるようなものである」という表現は、「組織神学者にとっての宗教史の意義」においても⁽²²⁾、また *ST* の最初の部分にも出てくる表現であり⁽²³⁾、最後期のティリッヒが頭に思い描いていたイメージを理解するカギとなる表現であると思う。ティリッヒはそれを「アリストテレス的」と呼び⁽²⁴⁾、さらに「もし潜在的なものの現実化がすべての存在の構造的条件であるならば、そして、もしこの現実化が『生』と呼ばれるのであれば、生の宇宙論的(universal)概念を避けることは出来ない⁽²⁵⁾」と主張する。そうして彼は「生の多元的統一」ということを言い、歴史もまた生の(最高次のであるが)次元である、とされ、かくして歴史論は生論の延長(extension)となるわけである⁽²⁶⁾。

ともあれ、こうして「進歩の理念」を読んでみると、*ST* において「本質化」、「永遠への高揚」などの諸用語を用いながら説明されていることと、「進歩の理念」において「成熟」という用語を用いて語られていることが、「永遠へと高まることである」、「常にそこかしこで起こっていることである」といった形式面のみならず、「本質的なものが現実化することである」という実質面においても一致するものである、ということが言えるのではないかと思う。

5 本質化と成熟

最後期のティリッヒが歴史のイメージとして持っていたのは、「種子が樹木になるような」という例えで説明出来るような「潜在的なものの現実化」,「本質的なものを何らかの仕方現実化するような実在が実存の諸制約の下で現実化する」といった事態であり,そこにティリッヒは生の意味に対する問いを,また歴史の実存的な意味の問いに対する答えを見たのであろう。*ST* の歴史論は,その線で書かれていると言える。しかしティリッヒは,*ST* 執筆時にはまだ「本質化」,「永遠への高揚」といったいろいろな用語を用いつつも,それを一言で言い表す概念の言葉を見出すところまではまだ行っていなかったようである。その傍証として挙げられるのは,彼が「成熟」という用語を進歩の理念との対比で,*ST* の中に登場させているということである⁽²⁷⁾。しかし,それはまだ「歴史の問いに対する答え」という役割を担う概念として用いられるまでには至っていない。しかし,一九六四年の「進歩の理念」において,「成熟」という理念は,歴史の意味の問いに対する答えという地位にまでティリッヒの中で昇格している。ともあれ,ティリッヒが *ST* において「歴史の意味の問いに対する答え」として「本質化」や「永遠への高揚」といった初出の用語を用いて言っていることは,要するに「本質的なものの現実化」としての「成熟」という一語によって言い表すことが出来そうである。さらに,この「進歩の理念」論文は,ティリッヒが人生の最後に書いた歴史論であるから,我々は,この「成熟」という理念を,ティリッヒの歴史論の最終到達点とみなすことが出来るであろう。無論それは,ドイツ時代から積み重ねて来た歴史論の集大成である,とは少し言いにくいものではあるが。

6 結 語

ティリッヒが *ST* で「本質化」,「永遠への高揚」といった用語を用いつつ語っている「歴史の問い」に対する答えとは,要するに「進歩の理念」で言うところの「成熟」のことなのではないか,という解釈をこれまでの議論で論者は提示した。しかし,もしこの解釈が正しいとしたら,そこからいくつかの問題が発生するのであり,最後にそのことに触れたいと思う。

ST において,「第五部[歴史と神の国]」は第四部[生と霊]の延長である⁽²⁸⁾ということが言われるが,確かに,先の「進歩の理念」の結論部分を見ると,生の意味の問いに対する答えはそのまま歴史の意味の問いに対する答えとなっているようである。これは,ティリッヒにおいて歴史の問いが実存的な生にとっての歴史の意味の問いであることからしても ティリッヒが問題にしているのは歴史そのものではなく,歴史の只中でハムレット的な実存的意味に悩む実存が発する歴史の意味の問いなのである⁽²⁹⁾。また,歴史が生的一次元である,ということからしても,必然的な帰結

「成熟」の神学

であると言える。しかしそこで直ちに問題となるのは、果たしてそれは歴史に関する正しい取り扱いであるだろうか、ということである。例えば、生ということ言うなら、確かに生命現象の中にティリッヒが言うところの「種子が樹木となる」ことに類比的であるような「可能的なものの現実化」を見ることは、それほど無理があることではないであろう。しかし、果たして歴史の中にそれを見ることは可能であろうか？ ティリッヒは、「進歩の理念」の中で「自由が存するところでは必然的な進歩というものは起こらない⁽³⁰⁾」という話をして、ヘーゲルの進歩主義的な歴史観を批判し、それゆえ直線的な進歩ではなくカイロスと成熟について語ろう、という話をする。このヘーゲル的な歴史観の批判、ということはティリッヒがそのアカデミック・キャリアのごく初期から言ってきたことであるが、しかし「潜在的なものの現実化」としての成熟ということを言い出すと、大局的に見るならヘーゲルと結果的にはそれほど変わらないことになってしまうのではないだろうか？

また、このようなティリッヒの歴史論を、ユニオン神学校でティリッヒの同僚であり、歴史の神学の代表者であるラインホルド・ニーバーと比較してみるとしたら、どうであろうか。ニーバーが歴史の問題として考えるのは、何はさておき「罪」の問題である、と言えるであろうが、例えば聖書を見ると、ヤコブの手紙一・15に「欲がはらんで罪を生み、罪が熟して死を生み出す」という言葉がある。もし成熟が歴史の問いに対する答えであるなら、我々が避けるべきことは罪というより未熟さである、ということになるであろう。しかし、この聖句によると、罪が成熟してしまうこともあるのである。もちろん、こういう言い方に対しては「それはティリッヒの『成熟』という語の用い方とは異なる」という批判もなされ得るであろう。しかし、たとえそうではあっても我々は、キリスト教神学者として、「成熟すなわち可能的なものの現実化に生の意味や歴史の意味を見出す」というプログラムは、罪がある以上うまくいかないのではないかとティリッヒに対してコメントする権利はあるであろう。

あるいは、ティリッヒは、成熟はそこかしこで常に起こっている、という言い方からすると、例えば生まれたての赤ちゃんがハイハイが出来るようになる、次につかまり歩きが出来るようになる、次にヨチヨチ歩きが出来るようになる、これらすべて成熟である、というような仕方でもっとスケールの小さいことを考えていた可能性もある。彼は「考え方では大人になりなさい」という説教の中で、「本当の意味で『大人となる人』とは、生き方や考え方において、その人本来の力に到達し、それを自由に使える人のことでもあります⁽³¹⁾」と述べている。この言葉においては、人間が成長してゆくことと可能的なものの現実化とが同一視されているようであるが、そうだとしたら我々は、それはそれで一応納得出来る。そうなると、初期の宗教社会主義時代に持っていた尖鋭さや厳しさがずいぶん弛緩していきさか老齡のゆえの緊張の喪失が起こっているのではないかと感じる。

また、ニーバーによれば歴史はドラマであり、それゆえ being や becoming で言い尽くすことは出来ないものであり、happening という要素がそれらに加えて入ってくるものであるのだが、先の

「成熟」の神学

ティリッヒの「種子が樹木になるような」というたとえを用いて言うなら、聖書には、種が蒔かれ成長しつつも、その途上で「鳥がついばんで食べてしまった」ということがあり得る、と書かれている。これは、やや大袈裟な表現かもしれないが、ティリッヒ的な論理を聖書自身が反駁している、ともみなし得るのであり、この点からしても、やはりティリッヒの歴史論の聖書的妥当性如何、という問題が出てくるであろう。

結論として、もし *ST* に描かれている、ティリッヒの最後期の歴史論は、「進歩の理念」に描かれているところの「成熟」すなわち「可能的なものの現実化」の中に歴史の意味の問いに対する答えを見出すものである、という解釈が正しいとしたら、それは現実の歴史にも聖書の記述にも合致しないものである、と言わざるを得ないのではないであろうか？

注

- (1) 本論は、二〇〇四年一〇月九日(土)に、東京女子大学において行われた日本基督教学会第五二回学術大会で発表した原稿に若干の手を加えたものである。
- (2) *ST* III p.249, 356, 369.
- (3) 神律は *ST* III pp.249-265, デモニックは pp.99-110.
- (4) *ST* III pp.369-372.
- (5) Jerald C. Brauer ed. New York: Harper & Row, Publishers, 1966.
- (6) *ST* III pp.347-348.
- (7) Paul Tillich, *The Future of Religions*, p. 79.
- (8) *Ibid.* p.64.
- (9) *Ibid.* p.77.
- (10) *Ibid.* p.75.
- (11) *ST* III p.396.
- (12) *ST* III p.400.
- (13) *ST* III p.400.
- (14) *ST* III p.401.
- (15) *ST* III p.401.
- (16) *ST* III p.420.
- (17) *ST* III p.420.
- (18) *The Future of Religions*, p.72.
- (19) *Ibid.*, p.76.
- (20) *Ibid.* なお、この言葉は、ティリッヒが「誤ったユートピア主義」を批判する文脈の中で用いられているものであるが、彼はあくまでそれが目前に迫っていると主張することを批判しているのであり、事柄それ自体を否定しているわけではないと思われる。
- (21) 森有正『森有正エッセー集成一』(ちくま学芸文庫、一九九九年)七～八頁。
- (22) *The Future of Religions*, p.88.
- (23) *ST* III p.12.
- (24) *ST* III p.12.
- (25) *ST* III p.12.
- (26) *ST* III p.297.
- (27) *ST* III pp.333-339.
- (28) *ST* III p.297.

「成熟」の神学

(29) *STIII* p.348.

(30) *The Future of Religions*, p.71.

(31) パウル・ティリッヒ 『永遠の今』(茂洋訳, 新教出版社, 一九八六年)一七三頁。